ロング書評『マルクス解体』

『週刊読書人』2024年1月5日号1面に、斎藤幸平著『マルクス解体』について、社会学者の橋爪大三郎氏がロング書評している。参考まで、抜粋して紹介したい。

晩期マルクスの転回が明らかになったのは、新 MEGA（マルクスエンゲルス全集）でマルクスの自然科学についてのノート（200冊もある）が読めるようになってからである。マルクスは農学や地学や化学や‥の先端知識の吸収に貪欲で、大英博物館に通ってはノートを取った。これら新資料を丹念に検討して、本書は書かれている。しっかりした資料の実証的読解にもとづく、堂々たる学術書である。だが本書は、単なる学術書の枠をはみ出してもいる。従来のマルクス解釈を超えて、いや、晩期マルクスの思索そのものさえ乗り越えて、脱成長コミュニズムのヴィジョンを描こうとする。斎藤氏の果敢な冒険に、熱い注目が集まるだろう。

マルクス主義と地球環境危機を接続するには、つなぎ目が必要だ。それが「物質代謝の亀裂」である。フォスターとバーケットの両名が、マルクスの物質代謝のアイデアを掘り下げて探り当てた概念だ。斎藤氏はこの概念を重視する。物質代謝の亀裂とは、循環過程の撹乱であり、空間的、時間的亀裂である。この亀裂を資本主義は、技術による転嫁や、空間、時間的な転嫁で乗り切ろうとする。その結果、地球環境の危機はなお深まるのである。マルクスは主義（赤）と環境保護（緑）は長い間対立してきた。赤が成長主義だったからである。だが斎藤氏が、これまで未発表だったノートを綿密に読み解くと、晩期のマルクスは成長主義を脱している。資本は、労働の価値を搾取するうえ、自然も収奪する、と書いてある。こうして赤と緑が手を結ぶならば、物質代謝の亀裂を修復する道筋がみえてくる。

成長を止めれば、環境への負荷はもちろんぐんと軽減される。でもその結果、人びとは貧しくなってしまわないか。そこで斎藤氏が注目するのが、マルクスの富の概念である。富は『資本論』の冒頭にあるように、資本主義経済では、商品の集まりである。それ以前の共同体では、商品とは限らず、共有地などのように人びとに共有され分け持たれていた。そこでは誰もがそれなりに豊かだった。それが囲い込み（エンクロージャー）のように私有化されることで、ことさら「稀少性」がうみだされる。人びとは労働力を売って必要な財を買い戻さなければならなくなった。貧しさは仕組まれて生まれたのだ。これが資本主義の秘密なのである。そこで、資本主義を解除して、共同体を復元すれば、稀少性が解除されて人びとは豊かになる。脱成長はむしろ、人生を充実させるだろう。斎藤氏の見立てである。こうした展望がまとめて書いてあるのは、本書の最終章である第7章。それまでの各章はマルクスの読解にほとんどのページを費やしている。さまざまなマルクス主義の新潮流に伍して「脱成長コミュニズム」ここにありと宣言するには、文献解釈で足場を固め、主張の根拠を確保して確保しておかねばならないのだ。

（2024年2月2日）